

「仮名読新聞」における明治九年の連載に対する再検討

佐々木 亨

要 旨 興津要氏は「仮名読新聞」紙上明治九年の連載を四点挙げた。同氏によれば、これらが有する文芸性は乏しく連

載記事と称すべきものではあるが、しかしその中にも小説的要素が僅かに認められるとした。如上の分析は、連載が徐々に成長を遂げたという立場からのものである。これらの連載を今一度仔細に分析すると以下の事実が浮かんでくる。

一 同時上演の芝居とのタイアップを図る。

二 新聞の購読者から隔たつた土地で大いに記事を創作する。

三 訂正記事を落語風に綴る。

加えてその日の紙面の余白に応じて内容の削除や引き延ばしも、しばしば見られるのである。当時新聞を主催していた仮名垣魯文は紙面の充実に腐心し、連載を特別の企画としつつ埋草原稿として活用していたと考えるべきであろう。物語性の獲得もこの操作に伴うもので、小説への接近を指向したといえるのは結果としてである。既に成立していた原稿を余白の都合で二、三回分載していたのが、当時の連載の実態である。従って物語性の獲得を当初から意図し、日々書き継いでゆくというスタイルの確立は、連載自体の内部要因に求めるよりも、翌明治十年の西南戦争における続報記事を契機とする方が妥当と思われる。

はじめに

連載小説の先駆的な存在はつづきものと称されている。この名称以外にも長物語などと表記される場合もある。⁽¹⁾当初つづきものは二、三回の規模が中心であった。明治十一年以降になると十回を越える所謂長物語が数を増してくる。その契機を明治十年の西南戦争の報道と関連付けて考察してきた。⁽²⁾人々の関心を集めた戦争が終結し、やがて戦報も商品価値を減少するに至り、これに代わる新たな商品が必要となったのである。夙に興津要氏は『新訂明治開化期文学の研究』（昭和48年、桜楓社）でつづきものを年次ごとに整理し、戦争から遡る明治九年における何点かのつづきものの存在を指摘している。興津氏の結論は、内容的に小説とは距離がありすぎて連載記事にすぎないものとこれを位置付けている。無論この論考そして『転換期の文学』（昭和35年、早大出版部）においても、同年の横浜小僧殺しの連載を紹介している。近時山田俊治氏は「文学」（平成15年1、2月号）の座談会でこの連載を紹介しつつ、ブームとなるほどの文化現象であった点を補足しつつ、西南戦争以前にもつづきものは点数を挙げることが可能であり、戦争を強調する必要はないとの見解を示している。事は座談会の中であり、これに対して反論を試みるのも野暮な話なのかもしれないが、氏の指摘に対して少しく私見を述べることも許されるかと思ひ稿を起した次第である。連載の数が「かなり」とか「けっこう」あるというのは、基準をどこへ置くかで変わってくる。またどの連載が早いかという問題設定も、後世の我々が限られた資料の中で行っているだけで、当時の読者は別にどれが早いかなどということとは問題にしていなかったはずである。以下小僧殺しの連載そのものを今一度詳細に分析し、連載としての性格付けを試みる。続いて同年の興津氏により紹介された、それ以外のつづきものを同様に分析し性格付けを行う。なお、興

津氏が紹介していない同紙同年の連載に関しては既に拙稿にて採り上げ、いささかの分析も施してある。⁽³⁾

—

まず興津要氏による横浜小僧殺し報道の論考について紹介する。『転換期の文学』において「岩田八十八の話」を紹介したのち、明治九年になると「へつづき物」はいまだとはいいながら連載記事はにわかに数をましてくる」と総括しつつ小僧殺しについて触れている。掲載の日付と簡潔な内容を示し、続けて以下のように指摘する。

この事件は同紙によればのちに劇化されたほどセンセーショナルな、当時としてはめずらしい残酷な事件であつたらしく、これなど現在でもビッグニュースが刻々経過を報道されるのとおなじケースとして連載された：

そして犯人が小僧の霊に怯える場面が僅かに「小説的」という評価を下す。同氏は更に『新訂明治開化期文学の研究』においても「仮名読新聞」の章で同連載を再び取り上げている。三月二日と四日の記事本文を引用して以下のように評している。

形の上からいえば、三月十二日の記事に「一昨日出刷の小僧殺しの読続き」とあるのが、へつづきものらしいスタイルだが、内容的にみて、いわゆるへつづきものというよりも、たんなる連載記事といったほうがよからう。

従って両書の評価には変化は認められない。内容として小説に接近しているか否かという基準によって、つづきものとは隔たりがあるため連載記事としておくというものであった。存在のいち早い指摘と、事件の劇化にも言及した点は氏の功績である。ただし両書ともやや不正確な指摘がある。それは「三月二、四、十、十二日と連載に」なったと

する箇所である。これでは四回の連載記事という誤解を与えかねない。山田俊治氏による後掲の著書の記事引用からも明らかなように、二日の記事を訂正したのが四日の記事であり、続報ではあるが連載ではない。四日の記事に創作を加えて報じたのが十、十二日であり、こちらは間違いなく連載である。その分析に入る前に、今度は山田氏の指摘を紹介しておく。

同氏の近著『大衆新聞がつくる明治の〈日本〉』（平成14年、日本放送出版協会）第六章の3「雑報記事と小説」において、横浜小僧殺しの報道について述べられている。始めに三月三日の記事の一部を引用してその内容を要約する。続いて四日の訂正記事についても一部を引用しつつ、改められた点を指摘する。更に十日と十二日にわたって、犯人の履歴から監獄で小僧の幽霊に苛まれるまでが挿絵入りで報じられており、物語化がなされている点を強調している。同時に十日の記事に先立って、同事件の演劇化がなされていることも見逃すことなく指摘し、のみならず半年後にも演劇化がなされ、それが松林伯円による講談に基づくものであったことも明らかにしている。

以上の如く山田氏は興津氏の不正確であった指摘を訂正したうえに、講談と演劇というジャンルを越えたメディアで採り上げられるほどのブームが存在していたことも初めて明らかにした。同氏から教えられる事実が多い。ただしここで問題にしたいのは、何故記者（恐らく仮名垣魯文と思われる）は、既に報じた記事を同紙初（と思われる）の連載にしてまで報じようとしたのかという点である。この記事がどのような意図でものされ、どのような意味を持っていたかを読み解く作業は意味がある。連載という形式にのみ目を奪われ、この視点に対する考察がなされてはなかったからである。さらにこの連載には山田氏も指摘する如く挿絵が伴っている。当時の「仮名読新聞」には珍しいことである。センサーショナルな事件ゆえ挿絵付きにしたというだけなのであろうか。以下連載の分析を試みる。

前述の如くこの事件は合計四回報じられている。三月二日は小僧が大金を持ち逃げしたという誤報で、四日はその訂正としてその小僧こそ被害者であるとする。従つて連載という範疇から除いて然るべきであり、以下考察の対象としない。残り二回が訂正記事を受けて詳報したもので、十日と十二日の連載である。まず十日の内容から確認する。山田氏も指摘する如く、記事に先立ち演劇化の記事があり、以下の如くである。

金が敵の引語に聞く杉田の盛り時、梅の由兵衛長吉殺し、鷲と鴉の黒白も判然分る照屋の鏡、野中の古井狂言を新規に脚色一夜漬、深き奸計を浅次郎丁稚の帰店をまつ野屋が、必定左右田と追手の人数折柄降出す雨の宮、花道ならで死出の山、其實録を横浜の吉田町なる清正堂地内に春めく山中座、歌舞伎に摸す題号は則ち

「開化新談小僧の米櫃」因果応報四番続

○南仲通一丁目松野屋店の場合○同四丁目雨宮小僧殺しの場

○同町椎津安兵衛住家の場○御白州の場○墓所怪談の場

大切所作事浄瑠璃共一昨八日より始まりく

(引用に際し句読点を補い、ルビは必要最低限残し、極端な宛字もそのままにしてある。以下も同様) 梅沢由兵衛との類似性に対する認識は既に事件当時からのものであった。芝居の内容を推測するに、大金を扱う店と真面目に働く小僧を先ず出す。続いて自宅に引き込み金を奪うべく小僧を惨殺する場面に転ずる。死体を隠した米櫃が預けられていた家での騒動へ続き、動かぬ証拠と自白に及ぶ。浮かばれない小僧の霊は救済を求める。以上の如き

内容であつたと思われる。

さてこの記事に続くのは挿絵である。犯人が獄舎で小僧の幽霊に苛まれ、逃げようとするが裳を掴まれる。新聞記事の挿絵としては創作色濃厚なものであり、読者に強い印象を与えている。当然読者はこの場面を念頭に置きつつ以下記事を読んでゆくことになる。

その冒頭は「六十一号に載せた横浜南仲通松野屋左右田金作の雇丁^{こぞう}椎五味浅次郎（或ひハ浅吉とも呼しなり）を残^む酷^こたらしく縊り殺した雨宮（家名照屋）忠右衛門ハ」とあり、四日の六十一号の記事を承けて、これを仕組み直したものと提示している。当然前回より詳しく、かつ興味深く報じられねばならない。以下梗概を便宜上の番号を付して示す。

①雨宮の生まれと故郷での悪評。横浜での謀反勝負の有様と入獄。出獄後の成功と妻の死。後妻を娶るも閉店に及ぶ。妻の又従兄弟の子供である浅次郎を松野屋へ斡旋する。

②松野屋における浅次郎の仕事ぶり

③金を運ぶ浅次郎を自宅に招き惨殺する雨宮。死体を隠した米櫃を椎津安兵衛へ預ける。何食わぬ顔で行方不明の浅次郎の捜索に加わる。浅次郎の母の心配。

これに続いて以下の予告が添えられている。

偕此次ハ、忠右衛門がお召捕の手続きより椎津安兵衛が預りの米櫃から浅吉の死骸と三千両の金札^{きんさつ}が出て、雨宮の悪事露見^{おき}檻倉^{おき}の内にて流石の悪人も心経病に犯される大怪談、其妻あいが大胆にも彼の米櫃を井戸にて洗ひ再び用ゆるお話しハ引続て六十五号にお聞に入れます。

これは云うまでもなく読者に次号も購読させるための戦略に基づく。ここで注意したいのは次回の内容がかなり具体

的に提示されているという事実である。これは続報の原稿が既に出来ていた可能性を大きく示している。全体の分量から推して、当初から二回分載の予定ではあったもののどこで区切るか明確には決定しておらず、紙面の都合で掲載しきれなかった分を次回に回したものと思われる。ここで再び挿絵に注目する。小僧の霊に苛まれる雨宮が描かれていた。この場面は今回の記事中には存在していない。次号の予告になって初めて顔を出すに過ぎない。読者はその場面があるものと期待して読んでいるはずである。印象的な挿絵を示し読者を惹きつける役割のみを背負わせたと考える他はない。最後の場面の挿絵にしたのは、やはり掲載可能な紙幅を予測できず、どこで区切っても構わないようにしたからであろう。次号の挿絵は米櫃を開けて死骸を発見するというショッキングな場面である。挿絵は予め彫らせておかなければ間に合わない。急に変更することは不可能である。死体の発見と幽霊の復讐という絵になる二場面を挿絵として作成させる。本文も犯人の生い立ちから犯罪の報いを受けるまでを書き上げてしまう。その原稿をどこで区切るかはその時のニュースの分量に左右される。連載二回目には、予告されていた米櫃を洗って用いるという場面はなく、紙幅の都合で削除されていることも判る。

挿絵が二葉用意されていたのは、二回の分載を予定していた証しでもある。分載という行為を考えれば、読者に対して次回を期待させるという効果が生じることになる。⁽⁴⁾ここで問題になるのが、挿絵の掲載順である。第一回連載の挿絵に描かれた幽霊は、二回目の挿絵における米櫃からの死骸に場面として遅れているのである。筋としては逆転してしまふ。これもやはり区切る箇所をどこでもよくするための工夫であろう。米櫃の方は幽霊よりインパクトが弱いし、筋が飲み込めないと判然としないから二回目に宛てられた。綿密な計画を立てて二回の連載を考えていたなら、筋と挿絵が噛み合うように努めるはずである。分載によって読者を繋ぎ止める意図があったとするには少しお粗末ではないか。むしろ場当たりの紙面作りを窺い知ることができよう。

続いて連載の二回目の梗概を示す。松野屋では手分けをして小僧の行方を尋ねるという前日からの場面に続いて以下のような展開となる。

- ④ 雨宮の捕縛より、米櫃を預けられた椎津安兵衛はこれを詮索し、浅次郎の死体が発見される。
- ⑤ 動かぬ証拠の出現により雨宮は白白に至る。
- ⑥ その夜雨宮は監獄で浅次郎の幽霊に責め苛まれる。
- ⑦ 浅次郎の両親の嘆きとこれに対する施し

今回の挿絵は前述の如く安兵衛の妻が米櫃を開き驚愕する場面が描写される。

以上のように犯人の出自より犯行に及ぶまで、そして幽霊という装置で報いを与え、両親への癒しに至るという勧善懲悪に基づいた内容になっていることが判る。幽霊の出現に対して「心経の^{うづ}勞れ」という解説を施す部分に時代性を指摘したのは興津氏の『転換期の文学』である。また記事の持つ物語性を指摘したのは山田氏の前掲書であった。幽霊が出現し、勧善懲悪の色彩も帯び物語的という指摘は将にその通りである。私が注目したいのは、創刊間もない「仮名読新聞」が何故このような物語性を持つ記事を掲載したかというその意図、商業戦略である。事件の持つ特異性に帰結させるには、同時期同紙の記事として突出しすぎる内容と思われるし、二回の分載もまた例外的といえる。何か特別の目論見がそこにはあるのではないか。

ここで再び連載された第一回の紙面に戻ってみよう。記事に先立ち幽霊の挿絵があり、これは読者の興味を惹きつけるべくここに配されていた。それに先立つのは事件を演劇化した際物の紹介記事であった。タイトルが「開化新談小僧の米櫃」である。連載二日目の挿絵は将にこの米櫃が描かれている。更にこのタイトルの角書に相当すると思しき「開化新談」は「怪化新談」をも掛けている。前述の如く同劇の最終場が「墓所怪談の場」とあるからである。す

ると連載第一回の挿絵はこの角書を踏まえていることになるのではないか。用意された二葉の挿絵は事件に取材した芝居のタイトルと見事に対応している。それでは内容の方はどうであろうか。ここで劇の場面と記事の梗概における各番号の場面对応させてみる。

「開化新談小僧の米櫃」

「連載小僧殺し」

ナシ

① 雨宮の出自から浅次郎を斡旋するまで

○ 南仲通一丁目松野屋店の場

② 松野屋の浅次郎

○ 同四丁目雨宮小僧殺しの場

③ 浅次郎の殺害と行方の探査

○ 同町椎津安兵衛住家の場

④ 椎津家の米櫃の詮索と死体の発見

○ 御白州の場

⑤ 雨宮自白

○ 墓所怪談の場

⑥ 幽霊の復讐

ナシ

⑦ 父母の嘆きと癒し

無論梗概をとるにあたり恣意的な要素も入り得ることは承知しているし、芝居も実際見てはいないので想像の域を出ない。しかしかなり濃厚な対応関係は認めて然るべきである。小僧殺しの連載は、確かにつづきものの初期の代表的存在ではあるが、同時期に上演されていた芝居とのタイアップを意図したもので、物語化がなされた理由もここに求められるし、特別な企画というべきである。連載という形式に対して商業的な価値を見出している可能性は極めて低い。二日間にわたったのは、既に成立していた原稿の分量に加え挿絵添付ということもあり、一回の紙幅には収まらず結果として連載となっただけである。

四日の訂正記事から連載の開始まで六日間ある。記者（仮名垣魯文であろうか）は芝居興行を知り、それに沿うよ

う事件に脚色を加える。想像を逞しくすれば、演劇化の相談を受けていたかもしれない。「新規に脚色一夜漬」なる一節も見られる。そうであれば記事を借りて自作の宣伝もすることができ(5)る。原稿の分量から二回の分載に決し、芝居のタイトルに合わせた二場面を選び、すぐさま二葉の挿絵を作成させた。これまで無難な紙面作りを手探りで進めてきた魯文が、ささやかながら初めて本領を発揮した瞬間でもあった。

三

小僧殺しの連載がものされた明治九年において、興津氏が前掲両書にて紹介した「仮名読新聞」のつづきものは他に三件ある。これについても個々に分析を加えてみよう。まず十月四日から六日まで三回連載の「女盗賊お常の伝」である。四日の第一回にはタイトルがなく、「昨日一寸お約束の：今月一日召捕られた」と書き出され、三日ほどの事件に取材している。と同時に前日より原稿の用意は調えられていたようである。藤沼つねは大坂の生まれで、幼いときより札付きの悪と設定される。故郷を追われる如くお常は横浜へ流れて遊女となる。娼妓解放令に伴い間夫と所帯を持つが、夫の病死によって横須賀で遊女に復帰し、更に三浦で密売婦となる。お常を形容する表現としては「古鼠く胡乱く泥に汚れた土腐不寝身」あるいは「手管と手癖の手練者」とあり、悪として終始描かれ、これもまた勧善懲悪の世界に基づいている。三浦で日を送るところで連載第一回が終了する。その結びは次の如くである。

又も不良事(よからぬこと)を仕出かし此所ろを脱出して、故郷に近き神戸に走り又如何なる事を為か、乍(そ)ハ明日解分るをお聞下(きくだ)さい。

第一回は横浜やその近辺であったのが、翌日は神戸という横浜と共通性を持つ開港を設定しつつも遠隔地へと話は展

開される。

翌五日の連載二回目は「女盜賊お常の伝 昨日の続き」とあり、興津氏が『転換期の文学』においてタイトル伴うと指摘した通りである。別稿で指摘したように、同紙は同時期に特別なコラムを設け邦人の海外渡航を連載しており、今回タイトルを伴う連載となったのもその流れの中に位置づけてよいであろう。さて二回目の梗概を以下に示す。お常は神戸で浅野庄次郎と結ばれ、浅野の故郷である長崎へ母を伴い行く。お雇い外人宅で働くうち大金と証券を盗み出し、離縁を装って神戸へ戻る。浅野は、もはやお常は他人と詮議をかわし、やがて神戸で合流する。母には金を握らせ離別した後、現金を使い果たして証券のみとなる。以上の如く筋が豊富であり、一紙面の半分を遙かに超える分量で報じている。これは当然その日のニュース数と関係しており、余白を埋める必要があった結果である。しかし最後まで載せきれなかった。その結びは以下のようになっている。

記者曰此結局ハ昨日の当社大新聞で大概知れてハ有升が、詳細こまかい事を記載かきのせ升から五退屈でも明日迄五辛抱残るはお常の捕縛のみではあるが、翌日に回す必要が生じた。その結果「詳細い事」を付け足す戦略に迫られたのである。その営みを連載第三回によって確認してみたい。

翌六日も前日と同一のタイトルで始まっている。お常は旧知のお鉄に証券の換金を依頼したが、そこから足がつき御用となるという至って単純な筋である。従って余白を埋めるべく工夫を凝らしている。例えばその書き出しては次の如しである。

一朝の欲に迷ひて百歳の寿を縮める者は貧にして、十年の憂世を経るより寧ろ富て、一年の榮華に飽んと欲するの夢想ならん。

更にこれに続いて学問の重要性と、これを習得しないばかりに悪に走るから学ばねばならないと説く。小新聞にある

常套的な教訓ではあるが、昨日の筋を中心とした記事には見出せない内容であり、七行にわたって展開させている。教育の重要性を冒頭に掲げる新時代風な読み物に接近しているなどと考えるより、常套的なスローガンを並べ立てて引き延ばしているだけとすべきである。

また今回の結びに配されたお常が御用となる場面の描写にも特徴が見られる。

流石の悪婦身に覚へあるお手配り、今更何をわるびれ申さん。併し寝間着の俣なれば、攻てものお情けにハ衣類を着換る纈の暇を御用捨の程願ひたしと寸暇を乞ひて、筆筒の引出しあくるわびしき葛城の、髪の乱れを搔揚ながら、誰か悪事をつげの櫛、如何に鳴海の浴衣の上に、重ぬる罪の袷せ衣、身に染む秋の山をろし、吹靡かれつ夫婦等しく引立られて屯署^{たしや}に至りぬ。

ここは興津氏によって前掲両書でも紹介された小説風の描写とされた箇所である。確かにレトリカルな物語性を印象づける記述ではある。しかしこれもまた前述した掲載上必要なる操作の結果である。引き延ばすべく修辭的表現を並べ立てているに過ぎない。お常の連載は二回程度の分量を用意していたが、紙幅の都合で三回に及んでしまい、飾りを施して切り抜いたのであった。そこには確かにその都度書き改めるといふ作業が要求され、連載の形式に接近しつつあるが、それは必要に迫られた消極的理由によるもので、基本的には既に成立していた原稿を分載したものであった。女白波という商品価値が高い素材を選定し、一回分の長短の工夫をなすに際し格言の連続やら戯作調やら手慣れた文飾を施す。若き日々抄録本を多産してきた魯文にとって、手っ取り早い紙面充当の方策であった。

今回の記事は逮捕こそ横浜であるが、神戸や長崎を中心に遠隔地で展開されていた。この辺の描写は当然想像によっている。遠隔地と創作記事との関係は次作へも継承される。

四

興津氏が次に指摘している連載は、同年十一月四日から九日まで三回にわたる「名古屋帯旅寝の虚解」である。タイトルが芝居風である点が特徴とされる。以下この記事を分析する。雑報欄に配されながら、他の記事と区別するべくタイトルが与えられ、その下には「上の巻」とある。ということは上下あるは上中下で完結することが予め決定していることになる。これもまた既に出来た原稿を分載したものであることが判る。本文の冒頭は以下の如くである。

浪花津からさく夜の便り。大坂順慶町一丁目陶器渡世（備前屋）渡辺与七ハ：

ここで特徴的なのは人物名が特定されていることである。後述する如く報ずる内容としては犯罪ではなく、名誉を損なう類のものであり、次に紹介する連載「喜美男誤」では巧妙に氏名や屋号などが隠されていた。そしてそれは横浜の出来事であった。対して「名古屋帯」は大坂種とする。これは訴えられる危険性が少ないことと関係する。当時は未だ東京の新聞は大坂においてそれほど普及していない。のみならず横浜や東京の出来事であれば虚報であるか否かはすぐ明らかとなる。大坂の出来事として大いに創作を施しても非難される危険性が少ないし、それどころか氣づく者も殆どいない。これまた後述するが、この「名古屋帯」は日付が特定されていない。記事としてはやや異例である。ここからしても創作の可能性大であることが判る。大坂種が持つ利点を雄弁に語る連載であり、この利点はつづきものの大ヒット作「金之助の話説」へもそのまま継承されている。

上巻の梗概を以下に示す。与七は商いに行き詰まり妻おみつに弱音を吐く。おみつは自分が名古屋の間屋へ支払いの先延ばしを依頼するとともに、瀬戸の窯元より商品を仕入れるべく出立すると夫を励ます。船中でおみつは癪を起

こすが、神戸の商人越後屋の介抱により快氣する。以上の如く単純な筋で長くもない。本文の結びには「サア是からが新聞じやが余白あきがないから又明後日」とある。即ちこの日は記事の数が揃っており、あるところで区切らざるを得なかったのである。さて区切る場合、もとの原稿を余白に応じて機械的に分けると考えるのが最も自然であろう。但し余白に合わせて区切ったとしても、原稿そのまままで済むとは限らない。どうしてもびったりと当て嵌めるための調整が必要となる。引き延ばすか削るかである。削る方は元原稿を区切る際の加減で補える。従って短めに区切っており、残りの余白に当て嵌まる分量だけ引き延ばす可能性の方が高いと思われる。その証しが会話体と思われる。梗概に示した如く、今回は夫婦の会話が前半に配され、夫が四行、妻が六行並ぶ。特におみつの会話には「氣にかゝらぬでもおませんけれど」とか「むづかしふ有ますさかい」など上方弁が用いられている。これは土地のムードを伝える工夫であり、確かに創作性の獲得といえるのだが、引き延ばす際に付け加えた一趣向であろう。従って結果として創作的になったと考えるべきである。また既出の結びの文言は、嘶家のつづきばなしの口調を思わせるものでもあり、会話文の使用もそれを意識してのことかもしれない。

次に連載二回目を見る。タイトルに続き「中の巻」とある。冒頭は次の如き教訓より始まる。

女の黒髪にハ大象もよく繋がれ、女の穿たる木履にて作れる笛には小男鹿も声に引かる、古言ハ世に伝えて誰も知れど……

『徒然草』でもお馴染みの色香に迷う男の性を指摘する。これが五行に及び漸く前回の続きが始まる。筋は、おみつが越後屋を誘い大垣で同宿するに至る、という単純なものである。かつ短くもあり、十三行の分量に過ぎない。これに対して、冒頭の教訓の分量を考えると今回もやはり引き延ばしが行われていたことが明らかとなる。結びの予告には以下の如くある。

報者^{しらせ}曰、是より名古屋玉屋町にておみつが手練の逆反^{さやくはん}し、彼商人が金革の時計を押へ、のツピきさせず金五十円を手に入れる悪婆の働きハ下の巻で読切ます。

今回の内容が具体的に示されており、既に原稿は準備出来ているようである。今回のあまりの短さは、余白の余裕のなさによるもので、空き地がありさえすれば更に先まで掲載し、結果さえも報告できたのかもしれない。二回、三回どちらでも終われるようにと上の巻から始めたのであろう。今回は「名古屋帯」に続き芸者の紹介とモグリ芸者の記事との二本が配され、むしろこちらの方に力点が置かれている。以上の如く埋め草原稿として活用されていることが判る。注目すべきは、本文の結びに「寝物語のならば夜具、定めし夢を結びしならん」とあり、これは記事の範囲を逸脱している。読者へのサービスではあるが、区切るに際しての工夫でもある。文芸的といえるか否か問題があるものの、前回同様引き延ばしに際して結果として創作性の確保が見られる。

第三回目は三日後に掲載された。間隔が空いた理由を冒頭で次のように断っている。

記者曰此報去る四日五日の両日にうち続き、上中の二回を掲載せしに、翌六日より西国中国暴徒の風聞殊に激しく、随ツて余白なく、且報知^{しらせ}の原稿^{しんがき}遅送りしゆゑ中絶四日に及びたり。

七日に前原一誠の特集を、八日は前原に呼応した思案橋の暴徒の風聞を掲載しており、その結果「名古屋帯」は後回しにされたのであった。引用文中には「四日五日」とあるが、五日は休刊日で連載二回目は六日の掲載、今度の三回目^{しんがき}が九日なので、正確には「四日」間ではなく二日の中絶である。これは書き手側の原稿作成間隔に基づいていよう。これまでの二回とは異なり、今回は少し豊富な筋を持っている。名古屋で各々違う宿に泊まるが、おみつは日々通う。やがておみつの企みを感じた越後屋は引き上げようとするが、そこへおみつが来て隙を見て金時計を持ったまま外へ出る。越後屋は瀬戸で追い付き、五十円を支払って返してもらう。筋として縮めてしまうと載せることができない。

いが、今回は時計を返すよう迫る越後屋に対して、おみつが上方言葉を操りながら傷物にした責任を問うべく凄むところが山場である。本文でも「内心の如夜叉を顕す不敵の権幕」と形容され、毒婦の相を印象づけている。そして最後は格言めかして以下のように結ばれている。

神戸のお客も新聞へ斯^かありくと出されてハ旅の恥ハかき棄とも行ますまい。又おみつさんも五亭主の為とハいへ、チト横道の金策で有ました。嗚呼恐る可し。

締め括りにもあるように、今回の連載は何の事件性も持つてはいない。下心を持った男が、女に手玉に取られただけのことである。それを巧みな会話のやり取りを中心にして読者の興味を惹くべく綴った。舞台は大阪から名古屋へ移動するが、いずれも横浜や東京からは隔たった場所である。そこで事件性のない色欲に基づく失敗談を展開する。恐らく殆どの部分が虚構であったと思われる。タイトルの「虚解」はどこまで関係を持ったのかを思わせ振りに示すものではあるが、「虚を説く」ことをも暗示しているように見える。その意味ではある種の文芸性を獲得しているといえるのかもしれない。埋草原稿的な毒婦記事を、スペースの関係で三日に跨って連載したのが「名古屋帯旅寝の虚解」である。

この連載がこの時期にこのようなタイトルを襲って掲載された理由をどこに求めるべであらうか。芝居風のタイトルという興津氏の指摘に沿って考えてみたい。すでに横浜小僧殺しの考察部分でも触れた如く、芝居の紹介記事はしばしば掲載される。上演される芝居の梗概を講談口調で連載するケースも多い。一例を示せば十月二日の記事で「新富座狂言の続き 松廼家一光報」として梗概の続きを掲載し、その中には「サア此上ハ客が対人^{あいて}だ。愚頭く仕^しずに出やアがれ」などという会話文も盛り込まれる。文末は次回予告で「愈次号ハ両国大徳院の歯骨納より大切賤が嶽^{つぎ}の場合までお聞に入れます」となっている。連載の結びは咄家や講談語りの口調を利かせる場合が多く、芝居の筋紹介

の連載でもそれは同様である。「名古屋帯」がこれまでになく会話体を多用する理由もここに求められるのではない。上巻の一部は会話文の文頭に鈎カッコ印を伴っており、前述芝居の会話引用箇所においても、文頭に同様な鈎カッコ印を備えていた。

「名古屋帯」の連載に四日遡る十一月二日にも芝居の紹介記事が掲載されている。

昨日も一寸載せましたが、新富座の新狂言小名題より筋書横書大名題まで、東京横浜諸新聞の題号入面白く出来ましたが、模写して遠国へお目にかけます。東西／＼ 朝野 賑 泰平余沢横浜迄鳴響／曙一番太鼓 実 維新 富座の栄

当然のことながら上演芝居のタイトルを掲げている。「名古屋帯旅寝の虚解」もこの辺からの思い付きであろうか。単に芝居めかしたタイトルとするより、会話体の多用という特徴と併せて芝居紹介の連載記事からの影響を考えてみる必要がある。当時、芝居の紹介は同紙の大きな特徴であった。

毎日求められる紙面の充当。余分に記事がある時は削ればよい。しかし足りない時は何とかしなければならぬ。窮余の一策は、事件でもない虚報を遠隔地において展開させる。仕立ては芝居風なタイトルを伴わせ、嘶家風の語り口調にしてみる。文体の工夫は無論他紙との競争にも依るものであろうが、一方において魯文たちの紙面として体裁を繕う苦闘と、商品価値を有する記事の探索がそこには垣間見られる。

五

最後に検討するのが、十一月二十九、三十日の二回にわたる「迷路喜美男誤 一名おとこ地獄」と題された連載で

ある。興津氏は特別な題名を指摘していた。タイトルに続き「掛合岩泉亭平喜」と紹介される。後述の如く、これは本文に登場する芸者とその情夫の名前をばかして示したものである。本文に先立ち、噺家が寄席で語っている挿絵が配され、落語の続き噺を連想させる。タイトルと挿絵、そして本文も含め一紙面の七割以上を占めている。更に注意すべきは、今まで紹介してきた連載と違い、新聞欄のあとに配された独立したコラムとなっている点である。当然これは特別の企画であることを示している。

冒頭は『伊勢物語』の書き出しを使って業平の名を出し、『田舎源氏』の光氏の名も続けつつ「今の世には奇めづしい女たらしの男なん有けり」と紹介する。以下この男の生い立ちが紹介され、芸者を手名付けては母の店で稼がせ、加えて玄人素人の別なく貢がせ、昨年横浜に新居を構えるまでが紹介される。「名古屋帯」と違い今回は地元の話なので、人物名のあからさまな提示はなされていない。しかし文中に「」印を施した文字を繋ぎ合わせると、その氏名が浮かび上がるよう工夫している。一例を挙げれば以下の如くである。

以前ハ〔吉〕野の〔川〕上桜〔小花〕を咲かせ、浮名を流した芸者の腹の父てなし子にて

これより男の母の名は〔吉川小花〕と判る。以下「」内の言葉を整えていくと、「平兼七」という名が特定でき、これが問題の男の氏名である。更に横浜に建てた新居も「横浜弁天通二丁目にきたり」〔屋〕造りも立派に建て」という記述から、「きたり屋」なる芸妓屋であったことも示されている。

続いて登場するのが、この色男に貢ぎ続けた岩泉栄吉なる芸者である。若い芸者の小園と兼七が関係を深くし、手切れ金が必要になるとその工面まで買って出る。その埋め合わせをするべく、お国という芸者を新たに抱えて稼ぐことにする。しかし披露の金が必要となりこれも何とか捻り出す。お国は国助と改め披露も間近いとき、栄吉は兼七と国助の仲を疑い始め、とうとう箱屋に現場を確認させた。

以上が第一回の梗概である。冒頭の掛合とされた人名がこれで明らかとなる。娛猫楼国輔が兼七の新たな愛人で、岩泉亭平喜の前半が栄吉、後半が兼七の苗字となっている。掛合漫才に見立てた芸者と色男との三角関係を暗示する。一方タイトルの角書き「迷路珍説」は「明治新説」をもじったものである。「喜美男誤」は無論吉備団子から来ており、色男には棘があるという意を利かせていよう。寛政八年刊焉馬述の嘶本に『喜美談語』なる一本があり、冒頭は『宇治拾遺』を踏まえている。この連載も冒頭に『伊勢』を借用しており、記者（魯文か）の参考になっていたかもしれない。のみならず、この言葉が隠語として用いられた可能性も考えられる。本文中に、以下の一節が見出せる。

「客人に持前の氣味団子を一盆喰はせて金を借な」と飯の妻に道ならぬ邪淫を導く残忍の男の心ハ鬼ヶ島
ここは披露の金の捻出に窮する栄吉に兼七が勧誘する場面である。芸者に限定する必要もないのであろうが、転ぶことをこう表現していたのである。団子ではないが、近世後期には舟饅頭なる売春婦がいた。タイトルも芸者の乱れた性を暗示しているのであろう。一方副題にある「一名おとこ地獄」もまた、前掲の「男の心ハ鬼ヶ島」と呼応している。

さて連載の結びは例によつて次回の予告である。

サア是唐ハ二百廿四号に載せた日高川渡舟場わたしばの一段、いよく大黒屋大悶着の剃刀騒ぎより引続き…

これによつて今回も横浜小僧殺しと同様、一度報じた事件を基にしていることが判る。今回は芸者による情痴事件を連載に仕立てており、次回の記事も既に成立していることが判る。それでは既報記事は如何なるものであったのか。

二百二十四号は連載の五日前十一月二十四日に刊行された。該当記事を以下少しだけ引用する。

百廿三号に載ました梅暦の第二編目。斯て彼白拍子出雲のお国は〔平〕家の官女の流れと云、当港尾上町の玉虫と男ちかゑなら向むかふ面、〔金〕さへ返せばのんこのしやアだと〔七〕屋へかけつけ、十五円まゝとめて姉分の縁切に、

サア是からは此方こつちの物だと男に乗地の人力車：

百二十三号は未見ゆえ、その内容は推測するしかないが、色男の紹介と芸者との関わり、その三角関係の連鎖が報じられていたと思われる。「一」内を繋げると平兼七という氏名が浮かび上がるのは、既にここから用いられた手法であった。人力車中のお国は「額にきに如鬼と糸巻程な角を生して」怒り狂い、用意した刺刀を「挟む帯地も鱗形」と変わり、「弁天橋から神奈川浦まで、泳ぎ越さん」とつく息は火焰の如く、「蛇に成つたと人が見たら云ふ」勢いで大黒屋へ向かうまでが報じられる。しかしその結末は「読売新聞へ寄書があつたといふから、先此方は是切」と伏せられている。このように連載の基になった既報は、道成寺伝説を下敷きにした講談調の記述であった。

ここで注意すべきは、鬼女へと変身したのがお国となっている点である。連載では、栄吉がお国と関係する兼七に報復していた。従って既報は誤報であり、その訂正という意図も連載にはあつた。

第二回目は、翌日に「迷路きみだんご 珍説美喜男誤（誤植のママ） 第二回 掛合岩泉亭平喜」と題され、雑報欄の途中で独立させて

報じられる。「昨日申し上ました迷路珍説喜美男誤のお話しは」と書き始められ、続き斬しの体裁を踏襲する。今回は人名等を「一」で特定するのではなく、右側に○印を施し「かね」、「七」と読みとらせている。嫉妬に狂う栄吉は刃物を持ち出すが、途中で持病の癪のため引き返す。平気でいる兼七を更に憎み、けじめを求める。懷柔策に出る兼七を退け、店先で啖呵を切る。結局手切れ金を受け、国助も披露目をする事となった。ここでは道成寺伝説に基づく記述を用いることなく、会話体を多用し、啖呵に対する小僧の掛け声も添えたりしている。既報では講談仕立てであったものを今回は落語風に改め、その結末まで報じたことになる。二回という連載回数は既報の二回続報と一致し、余白を見ながら紙面を埋めていった。横浜小僧殺しも、誤報の訂正を承けて芝居とのタイアップを狙いつつ二回に分割したものであった。今回は芸者のスキャンダルという魯文の得意とする分野が、特別記事としてどれだけ

商品価値を持ちうるかという調査をも狙っていた。独立欄設置の理由もここに求められ、翌年には「猫々奇聞」なる芸者を対象にしたゴシップ欄を開設するに至る。⁽⁷⁾

おわりに

以上、興津氏が指摘した明治九年における「仮名読新聞」連載を再検討してきた。四記事のうち、二つは既報の訂正を承けたり兼ねたりしたもので、一方が芝居との並立を念頭に置きつつ、もう一方は落語風に綴られていた。残り二つは出来事の多くを遠く離れた場所で展開させ、想像を逞しくして文飾を施していた。加えて芝居でお馴染みの女白波や毒婦像も投影しつつ、上演中の芝居紹介を連載する企画とも通わせていた。当時の連載は、訂正記事を如何に新鮮味を出して提示するか、あるいは余白を埋める虚報を如何に飾るかという試みがなされており、そこへ芝居や落語が引つ張り出されたのである。

一方、二あるいは三という連載回数は、紙面の余白の都合で生じたものであった。既に書き上げた原稿を状況に応じて分載したのである。当時、仮名垣魯文は木版の如く自由裁量が利く媒体とは全く異なる、余白を残らず文字で埋める必要に迫られた窮屈この上ない新しい媒体である活版と格闘していた。そこで編み出されたのが、この連載なのである。回数を重ねるといふ視点への主体的な工夫は未だ見られない。

分載によってこの先どうなるのかという読者の楽しみは、確かに結果として生み出されつつあったかもしれない。しかし小僧殺しは筋の殆どが演劇化の予告によって示されているし、「喜美男誤」も既報の人物のみの訂正で、読者にとっても先は見えている。お常の場合も次回の具体的予告があり、捕縛自体は既報であった。唯一先の楽しみがあ

ると言い得るのは虚報の「名古屋帯」であった。魯文は未だ連載が持っているような効果を期待して分載を行うまでは至っていない。

やはり連載自身が持つ商品価値への認識は、何某かの契機を別途に想定するべきである。西南戦争が存在しなければ、二、三回の分載を埋草原稿として活用しつつ、文飾の実験を施す期間は更に続いたものと思われる。西南戦争は、それ以前の士族の反乱に比べて、規模も期間も遙かに大きなものであった。たとえ西郷の敗北が当初より予想されていたとしても、かつてないほどの期間にわたり読者を続報で引っぱり続けた。この契機があったからこそ、魯文も「鳥追お松の伝」を長く引っぱり張るところまで足を踏み入れたのである。

〔注〕

- (1) 拙稿「つづきものの論序説」(『言語文化と地域』(平成13・3、徳島文理大学)にて用例を挙げて指摘した。
- (2) 拙稿「『鳥追阿松海上新話』の成立」(『江戸文学』21、平成11・12)にて考察した。
- (3) 「つづきものと西南戦争」(『日本文学』一月号(平成16))
- (4) 山田俊治氏は前掲書において、「読売新聞」の雑報を中心とする分析に際して、分載によって生じる変化を「結末が先送りされることで、明日読む楽しみができる」とする。
- (5) 横浜時代の魯文が芝居の創作に携わった事実とは、「かなよみ」新聞欄(明治11・5・18)によって確認できる。
- (6) 注(3)に同じ
- (7) 翌年九月十三、十五日の「仮名読新聞」広告欄に、岩泉栄吉が「拍子扇流名披露順講の口上」を掲載している。自分は「新聞で五ぞんじの猫子にゃんこの者しやあ」であり、此度「都一かめ」と改名し十六日に披露の催しを挙行するというものである。芸者が自分のゴシップ記事を有名税と考えていた一例である。

※「仮名読新聞」の本文は、明石書店の復刻版(平成4・10)を用いた。